



Jポップ、Cポップ、 Kポップの起源 全日本フォークジャンボリー

現代中国学部 藤森 猛

50th FOLK JAMBOREE

2019年9月1日、野外コンサート「第50回フォークジャンボリー」が岐阜県中津川市にある樫の湖（はなのこ）で行われた。フォークソング、ポップスにおいては伝説となった日本初の野外コンサート「全日本フォークジャンボリー」が半世紀を経て発祥の地に戻ってきた。出演者は、かつて日本のフォーク界を代表していた高石ともや、中川五郎、小室等、六文銭などの懐かしい顔ぶれ。私自身も小学校6年生の頃に戻って、高石ともやのヒット曲「受験生ブルース」を口ずさみながら、家族を連れて会場に向かった。

野外コンサートに行く時は、まず腹ごしらえとアウトドア装備の準備。JR中央線中津川駅近くの寿司屋「すし天」でマグロのにぎりを持ち帰り注文し、JR坂下駅近くの「喫茶ロッコ」で



第50回フォークジャンボリー ポスター (2019年)



第50回フォークジャンボリー (2019年)

美味しいシフォンケーキをテイクアウトで注文して、道の駅「きりら坂下」にある洋品店「すみれ」で長袖・長ズボン・帽子・ビニールシートなどの野外コンサートに必要なグッズを整えてから会場に入った。

会場の樫の湖は森と湖に囲まれた有名なキャンプ地。「ここで、50年前に日本のフォーク・ポップス界のアーティストが勢揃いして、オールナイトでコンサートを行って、2万人くらいの観客が集まったんだよ」と鼻高々と家族に説明をしながら、コンサート会場に入った。樫の湖を背にしたステージには「遠望楽観」、「フォークジャンボリー」の幟が揺れている。ステージの周りは草地にシートや椅子を持ち込んだ観客の人たちが、いっぱい。ステージ上にいるグループの名を聞いて、びっくり。80才の小室等の率いる「六文銭」。プログラムを見てもう一度びっくり。野外コンサートは午後2時から夜間にかけてのコンサートだと思っていたら、当日は昼の12時開演で今はフィナーレ前の六文銭の演奏。家族の白い目を感じながら、腕時計の時間はすでに終演の午後4時近かった。

1st ~ 3rd FOLK JAMBOREE

1969年8月9、10日、第1回の野外コンサート「全日本フォークジャンボリー」がこの樫の湖で開催され、第2回 (1970年8月8、9日)、第3回



第50回フォークジャンボリー (2019年)
ステージ上 左から
及川恒平、四角佳子、小室等 (六文銭)



第3回フォークジャンボリー (1971年)
椈の湖キャンプ場事務所で

(1971年8月7～9日)も同地で開催され、フォーク、ポップスを中心としたアーティストが椈の湖に集まった。1969年は東大安田講堂事件が起き、学生運動、労働運動が急速に衰退した年で、日本のポップス界にも大きな変化が訪れた。

第1回～第3回フォークジャンボリーの主な参加者を見ると、赤い鳥、あがた森魚、浅川マキ、五つの赤い風船、五輪真弓、岩井宏、遠藤賢司、岡林信康、小野和子、上條恒彦、加川良、金延幸子、かまやつひろし (ムッシュかまやつ)、カルメンマキ、ガロ、クライマックス、斉藤哲夫、ザディランII、ジャックス、杉田二郎、ソルティ・シュガー、高田渡、田楽座、友

部正人、中川五郎、なぎら健彦、のこいのこ、はしだのりひこ、長谷川きよし、はっぴいえんど (細野晴臣、大滝詠一、鈴木茂、松本隆)、日野皓正、本田路津子、ブルースクリエーション、三上寛、ミッキーカーチス、村上律、村岡実とニューディメンション、安田南、山平和彦、山本コウタロー、吉田拓郎、六文銭などの錚錚たるメンバー。例えば第3回フォークジャンボリーの初日は午後2時に始まり終演の吉田拓郎、六文銭、岡林信康の演奏は深夜1時に開始され、二日目は山本コウタローの演奏にはじまり終演の開始されるのは深夜12時。二日間の昼夜を通じた野外コンサートであった。



第1回フォークジャンボリー ポスター (1969年)
JR坂下駅で

Jポップ、Cポップ、Kポップの起源

1969年から1971年にかけて計3回、岐阜県の椈の湖で行われた全日本フォークジャンボリーは通称「中津川フォークジャンボリー」と呼ばれ、Jポップの起源とされている。1960年代にアメリカから流入したフォークソングは、日本の労働運動、反戦運動と結びつき、特に学生運動の場で、学生たちが全員でフォークソングを歌って反戦を訴え、ギター一つで歌うフォークシンガーのゲリラコンサートに群がった。その代表格が岡林信康や高石ともやなどの「関西フォーク」と呼ばれるフォークシンガーたちであり、特に「フォークの神様」と呼ばれた岡林

信康の「友よ」などの歌は学生運動の象徴的な歌となった。

一方、このフォークジャンボリーには、関西フォークの流れに属さない新人のフォークシンガーも多数集まり、代表格は後に井上陽水、泉谷しげるとともにフォーライフレコードを設立した吉田拓郎、小室等であった。彼らの歌は反戦運動を歌った関西フォークと違って、個人の感情や恋愛を描いたフォークソングであった。岡林信康率いる関西フォーク（西軍）と東京で音楽活動をする新人の吉田拓郎たち（東軍）が岐阜県中津川の椈の湖で、3回にわたり野外コンサートで音楽的な手腕を競った（フォークソングの関ヶ原）。例えば「戦争を知らない子どもたち」の作詞で知られる北山修が参加した時のことを述懐し、「フォークジャンボリーでは観客からステージに、怒号と物が次々と投げ込まれ、怖かった」と新聞紙上で述べている。コンサートは野外コンサートであったため、ステージと観客席には境がなく、観客に支持されないアーティストは演奏の途中であっても観客からヤジが飛び、演奏が中断された。コンサート当日に観客から圧倒的な支持を受けたのは、岡林信康ではなく、吉田拓郎であった。

1969年から3年間行われたフォークジャンボリーでは、日本のフォークソングの主流は学生が連帯して歌う反戦歌から個人が歌う叙情歌へと変化したといわれている。1960年代まで政治性を帯びていた日本のフォークソングが、フォークジャンボリーを契機に1970～80年代に個人の感情を歌うフォークソングやニューミュージックに生まれ変わった。政治性がなくなった日本のポップスは、東アジア各国の若者の心をつかみ、「Jポップ」と呼ばれるようになった。中国では70年代に、中国政府により、ゴダイゴやアリスらのJポップグループの中国初のコンサート（78年北京工人体育館）が許可され、谷村新司の「昴（すばる）」が中国で大ヒットしたのを契機に、Jポップは中国各地で

流行をみた。鄧麗君（テレサテン）らの歌姫、崔建（ツイ・ジエン）らのロックミュージシャンを生み、1980年～90年代に「Cポップ」が生まれた。また韓国では1980～90年代にJポップの影響を受けた「ソテジワアイドル」などにより「Kポップ」が生まれた。1998年10月に日本の大衆文化が解禁され、韓国政府により、沢知恵（さわともえ）、金蓮子（キムヨンジャ）らによるJポップの韓国初のコンサートが許可された。2002年に日韓ワールドカップが開催された時に、Jポップの影響を受けた東方神起などの韓国アーティストがデビューし、「韓流ブーム」が生まれた。

2022年、「走れコウタロー」を歌った山本コウタローが亡くなり、「結婚しようよ」を歌った吉田拓郎が引退を表明した。椈の湖にはフォークジャンボリーの記念碑が立てられた。アジアのポップスに興味のある方は、JR坂下駅前の「喫茶マザーグース」やフォークジャンボリー資料館で、50年前のフォークソングの話を聞いていただきたいと思います。



椈の湖畔に立つフォークジャンボリーの碑
(2022年)